

マルコによる福音書 12 章 18-27 節 「新しくされる体」

1A 生きている者の神

1B 復活している聖徒

2B 霊的存在

2A 衰える体

1B 罪による滅び

2B 衰える外なる人

3A 体のよみがえり

1B 死で終わらない命

1C 一時的な目に見えるもの

2C 復活の約束

2B 霊の新生

1C 御霊の体

2C 天の体

3B 種まきと実

4A 死を呑み込む命

(詩篇交読 71 篇 16-21 節)

本文

マルコによる福音書 12 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びはマルコ 11 章まで来ました。今朝は、18-27 節に注目します。

18 また、復活はないと言っているサドカイ人たちが、イエスのところに来て質問した。19 「先生、モーセは私たちのためにこう書いています。『もし、ある人の兄が死んで妻を後に残し、子を残さなかった場合、その弟が兄嫁を妻にして、兄のために子孫を起ささなければならない。』」20 さて、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、死んで子孫を残しませんでした。21 次男が兄嫁を妻にしましたが、やはり死んで子孫を残しませんでした。三男も同様でした。22 こうして、七人とも子孫を残しませんでした。最後に、その妻も死にました。23 復活の際、彼らがよみがえるとき、彼女は彼らのうちのだれの妻になるのでしょうか。七人とも彼女を妻にしたのですが。」24 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、聖書も神の力も知らないのです、そのために思い違いをしているではありませんか。25 死人の中からよみがえるときには、人はめとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのようです。26 死人がよみがえることについては、モーセの書にある柴の箇所、神がモーセにどう語られたか、あなたがたは読んだことがないのですか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあります。27 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です。あなたがたは大変な思い違いをしています。」

イエス様が、エルサレムに入城されて、宮清めをなさいました。その後で、ユダヤ人の宗教指導者がイエス様を殺そうと思っていたのですが、群衆の手前、捕まえられませんでした。そこで、イエス様を陥れようとして、誘導尋問のような質問をしていきました。そのうちの 하나가、この死者の復活についての質問です。

1A 生きている者の神

サドカイ人たちが質問した、とあります。サドカイ人は、神殿の祭司職についている人々でしたが、彼らは死者の復活を信じていませんでした。目に見えるものを信じない、物質主義者でした。それで、一人の女が、七人もの人と生涯、結婚をしていた場合、復活したら誰の妻になるのか？という仮定の話をしました。兄の名を残すために弟が死んだ兄の妻を自分の妻としなければいけないという律法を使って、復活という考えがいかに馬鹿げているかを示そうとしていたのです。

物質だけを考えたら、復活という考えは馬鹿げていることでしょう。誰かが死んで、ある草原に葬られたとします。その体が分解して、その養分によって草が生えます。それを牛が食べて、その牛が乳を出します。その乳を誰かが飲んで、それでその人が死にました。では、復活した時にその人の体の中に、最初の人があるではないか！ということになります。

1B 復活している聖徒

イエス様は、何と言われましたか？「**思い違いをしている**」と言われます。聖書も知らないし、神の力を信じていないからだと言われます。そして聖書について、イエス様は出エジプト記から、語られました。サドカイ人は、モーセの書いた初めの五つの書、モーセ五書だけを神の言葉だと信じていました。けれども、そこにはっきりと、復活の証拠があったのです。「『**わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である**』とあります。」とイエス様は言われます。モーセが生きている時は、数百年前に既にアブラハム、イサク、ヤコブは死んでいます。けれども、主は、その三人を生きている者として語り、彼らの神であるご自身を明かされました。

彼らは、生きているのです。そして、神は死んだ者ではなく、生きている者の神です。今、生きている人々を心に留めておられるのです。そしてすでに死んだ人々も必ずよみがえらせることによって、生きている者の神となっているのです。

2B 霊的存在

ところで、サドカイ人のような人が、どうして復活を信じられないのか？人というのは、基本、肉体であって、それ以上のものはないのだと思っているからです。せいぜい、幽霊がいるのかな？とか考えていないのでしょうか。しかし、聖書は明らかに、人には霊があることを教えています。「創世2:7 神である【主】は、その大地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。」人の肉体は土地の塵と同じ成分を持っています。肉体は土地の塵で作られていますが、神の息によって初めて生きるものとなったのであり、霊を持っています。そして

その霊において、私たちは神を思い、神を信じ、神に仕えます。

実は、霊こそが人の本質です。私が明石清正という時に、どこを指しているのでしょうか？私の右腕がなくなったら、明石清正でなくなるのでしょうか？体のどこの部分で、私が私なのでしょう？それをよく考えると、私たちの体はあくまでも器であることがわかります。自分を表現する器がありますが、それ自体が私ではありません。本当の私は霊なのです。これは幽霊みたいなものではなく、自分が自分である本質的な部分であり、そして神によって初めて生きているということのできる部分です。

2A 衰える体

1B 罪による滅び

神が初めに人を造られた時、その体は衰えたり、滅びたりすることはないものでした。神は永遠の神であり、その形に造られた人も永遠に神と共に造られるようになっていました。けれども、神にアダムが罪を犯した時に「死」が入りました。「死」とは、その定義は離別を表します。自分の祖母が危篤だという時に、私は急いで病院に向かいましたが、間に合いませんでした。そしてそのまま、いっしょに伯父の車に乗って家に到着しました。そしておばあちゃんの遺体がそこにあり、葬儀のための整えが始まりました。それを目の当たりにした私は、「ここにおばあちゃんはいない」思いました。魂があって、その魂こそがおばあちゃんであり、けれどもその魂が肉体から離れているので、おばあちゃんは死んだと分かったのです。魂や意識が、肉体から離れているので「死」と言います。

そして、聖書では肉体は滅んでいなくとも、もし神から離れているならば死ぬと呼んでいます。善悪の知識の木から実を取って食べたら、必ず死ぬと言われた主ですが、アダムとエバが食べても、死にませんでした。けれども、神がいつものように園を歩いておられたら、恐れて隠れてしまったのです。神との交わりができなくなってしまいました。肉体は生きていても、神から意識が離れているとき、神のことを思うことがないとき、神を認めないならば、それは霊的に死んでいるということです。それでイエス様は、「再び生まれなければいけない」と言われました。新しく生まれなければいけない、とも言いますが、肉体の誕生だけでなく、霊的な誕生を経なければいけないということです。それは、自分の罪のために十字架に付けられたイエス様を信じる時に与えられるもので、そこで初めて永遠のいのちを得ます。

そして、主は、罪によって体が滅びゆく体になってしまっているのを、贖われた霊に合わせて、再び体も永遠に神と共に生きることができるよう回復して下さるのです。それが体の復活です。初めに、霊を新しく生まれさせ、それから体も新しい体に変えて下さるのです。

2B 衰える外なる人

私たちの体は、衰えを始めます。二十代、そして三十代になればどこかしたらで、自分の今まで

したいことができないという衰えを覚えます。自分を表現するはずの器が少しずつ、その機能を果たさなくなっていくのです。それで自分のしたいことが制限されていきます。そしてついに、霊が空だから離れます。これは、聖書に出て来る、息を引き取った人々に数多く出て来る内容です。イサクは目が見えなかったので、ヤコブが、自分がエサウだとだましました。そのヤコブも目が見えなくなりました。ダビデも、最後は寝ていても体が温まりませんでした。だれもが、老いを経験します。

3A 体のよみがえり

そして死を迎えますが、その死に対して「これで終わりだ」と思う人たちが多くいます。死んだら終わり、だと。私もそういった考えを持っていた少年時代、死ぬのが怖くなりました。生まれる前に、つまり意識がない時に、何千年、何万年という月日があった。死んだら、全て無くなるのなら、同じように永遠に自分の意識はなくなり、自分は存在しなくなると思ったのです。

1B 死で終わらない命

1C 一時的な目に見えるもの

しかし、聖書ははっきりと、霊と魂があり、それらは肉体が減びても続くと教えています。そして、新たに体を持つ復活があることを教えています。ここに希望があるのです、イエス様は言われました。「ヨハ 11:25-26 わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。」

私たちが復活を信じられる、その一番大きな根拠は、このことを語られたイエスご自身が死者の中から甦られたからです。主が甦られたというのが、とても興味深い記述が福音書にはあります。弟子たちが、イエス様が死なれてからユダヤ人を恐れて戸を閉めている時に、その真ん中に現れて、「平安がありますように」と宣言されました。このように物理的な制約に制限されていません。では、霊なのかというと全くそうではありません。いっしょに食事をされました。また、ご自身の打たれた釘の跡をお見せになり、確かに肉体を持っていることを示されました。そして、弟子たちはイエス様であることを認識できました。つまり、新しい体と言っても、全く別人に生まれ変わるのではなく、今の私と復活した将来の私は、連続しているのです。弟子たちがほっとしているように、何かサイボーグのような非人間的なものではなく、全く人間と変わりません。けれども、明らかに今の肉体とは異なり、減びることのない、朽ちることがなく、時には物理的な制限をも超えるのです。

そのイエス様が、「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」と言われたのです。死んでも生きるのです！今、目に見えるものは一時的です。パウロは、今の肉体を天幕、新しい体を家に例えました。前者は一時的なもの、後者は永続するものです。罪の結果、衰えて行くしかないこの体の後には、永遠に続くものを、神は私たちのために用意しておられます。

2C 復活の約束

歴代の聖徒たち、神を畏れる者たちが、復活の信仰を表明していきました。ヨブという人は、重い皮膚病に罹り、体からは絶えず体液が出てきて、痒みで夜も寝られません。しかし、そのような肉体の痛みと病の中で、大胆にこう宣言しました。「19:25-26 私は知っている。私を贖う方は生きておられ、ついには、土のちりの上に立たれることを。私の皮がこのように剥ぎ取られた後に、私は私の肉から神を見る。」イザヤは、こう預言しました。「26:19 あなたの死人は生き返り、私の屍は、よみがえります。覚めよ、喜び歌え。土のちりの中にとどまる者よ。まことに、あなたの露は光の露。地は死者の霊を生き返らせませす。」そして使徒パウロは、こう論じています。「ロマ 8:11 イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリストを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられるご自分の御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだも生かしてくださいませす。」

2B 霊の新生

1C 御霊の体

では、復活の体とはどういう体なのか？ということですが、先ほども申し上げたように、神と結ばれている霊に合わせた、カスタマイズされた体です。神の御霊によって、私たちの霊が新たに生まれました。その霊と今の体は絶えず葛藤があります。なぜなら、体にはまだ罪と死の原理が働いているからです。アダムから受け継いでいる罪があり、その罪が体の中に働いているので、自分の霊で望んでいることを肉体の弱さによって行なえないという呻きを、私たちは持っています。それでも、御霊によって肉の思いを殺すことができる自由があり、罪の力からは自由にされていますが、罪の傾向からはまだ自由にされていません。

いつもお話ししていますが、救いというのは三段階あります。もう既に、神の目には完成されており、救いも完成されているので、救われたのですが、それが実行に移されるのには段階があります。一つは、罪の罰からの救いです。罪に定められること、有罪とされることから救われています。神の怒りを受けることから救われています。次に、罪の力から解放されています。これは現在進行形です。私たちを支配していた罪の力は、キリストの十字架と甦りによって滅ぼされ、御霊が与えられているので、罪を犯さなくてよい自由が与えられました。御霊に従うことによって、肉の行いを殺すのです。そして三つ目は、罪そのものからの救いです。これが今、話していることです。アダムから受け継いだ罪の性質を宿す体から解放されて、神のかたちに似せた、キリストに似せた体を与えられます。そこでパウロは、こう言いました。「I コリ 15:44 血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。」

2C 天の体

そして、それはまた天でこしらえられた体です。今の体は、土の成分と同じもので造られています。神が土地の塵からアダムを造られたということは、科学的にもその通りだと確認できます。けれど

も、復活の体は天において神が備えてくださっているもので、それを私たちが身に着けることになります。私たちの肉体が死ぬ時、その古い体を脱ぎ捨てて、新しい体を身につけます。それは土地の塵で造られたのではなく、天において神が備えてくださったものです。アダムとイエス様を対比して、パウロがこのように論じました。「I コリ 15:47-49 第一の人は地から出て、土で造られた人ですが、第二の人は天から出た方です。土で造られた者たちはみな、この土で造られた人に似ており、天に属する者たちはみな、この天に属する方に似ています。私たちは、土で造られた人のかたちを持っていたように、天に属する方のかたちも持つことになるのです。」

復活はイエス様が天から主が降りてこられ、信者たちが引き上げられる時に起こります。イエス様は弟子たちに約束されました。「ヨハ 14:2-3 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとの迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」ここの「住む所」とは、何か建物があるのではなく、聖書のいろいろな箇所ですべて示唆しているように、復活の体ではないかと思えます。イエス様が天で用意しておられるその体を、ご自分が戻られる時に私たちに下さるということです。ですから、イエス様が今、生きている時に天から降りてこられるのであれば、その時は生きたまま体が変わられ、復活の体、神の栄光を表す体に変えられるのです。「I テサ 4:16-17 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」

天に行く、ということを私たちは気軽に話します。しかし、聖書では天から主が降りて来られたら、黒雲と稲妻、雷、そして角笛の音で恐ろしくて死にそうだと感じたイスラエルの民の姿があります。そして天の栄光の姿を見せられたイザヤ、ダニエル、またイエス様の栄光の姿を見た使徒ヨハネは、もうだめだ、と言って、倒れて、また死んだ者のようになってしまいました。天における栄光は、私たちには到底受け入れられないもの、罪の有る体では決して入ることのできないものなのです。ですから、天において備えられたその体をもって、私たちがよみがえらせてくださいます。

ところで、サドカイ派との議論の話に戻りますが、だれの妻になるのか？という質問に対して、「12:25 死人の中からよみがえるときは、人はめとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのようです。」と言われました。天で備えられた体なので、御使いと同じように婚姻関係は持たないのです。ですから、復活の体は、神の御霊にしたがう罪なき体であり、また、天で備えられた神の栄光に輝く体なのです。イエス様が地上に再臨される時は、その体をもって神の栄光を輝かせて共に戻って来ます。「コロ 3:4 あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。」

3B 種まきと実

いかがでしょうか？私たちは死で終わることなく、その後の命があり、復活されるということ。そしてその復活の体は、自分はそのままつながっているけれども、神の御霊による体、天に属する体であることが分かりました。そして聖書では、この変化を種蒔きに例えています。イエス様が、ご自身の復活についてこう言われました。「ヨハ 12:24 まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。」一粒の麦の種が、そのまま落ちている、その種のいのちを持っているならばそのままです。けれども、死ぬ、つまり、土の中で分化することによって初めて芽となり、茎が出て、葉を生やし、そして実を結びます。イエス様が生きておられたままであれば、そのすばらしい生涯で終わっていたことでしょう。けれども、死なれたから、無数の人々に生きる希望を与え、事実、復活する希望を与えられたのです。「死んだから生きる」という希望です。

それと同じように、私たちは自分の体の衰えに対して、そしてその延長にある死に対して、希望を持つことができます。それはまさに、種蒔きのようなものです。死ぬことによって、この体が滅びることによって、それで初めて命ある体へと甦るのです。死が死で終わりません。

私の友人の宣教師でダン・ポリンジャーと奥さんの実穂子さんがいます。彼らには長男カレブくんがいました。三歳にして心筋症を患い、その短い人生を終えました。しかし、彼は明確に、イエス様を信じ、受け入れていました。最後は、体にたくさんのチューブが付けられて、親も抱くことができなかつたのです。生命維持装置に付けられました。そこで父が彼に聞きました、「イエス様のところに行きたいか？」彼は、はっきりと意識をもって「うん」と答えました。それで親の承諾で、チューブが外されました。息を引き取った後に二人は抱きました。そして言ったのです、「ついに自由になった」と。彼を蝕む体から、彼はついに解放されました。ぼろぼろになった体です。けれども、彼は復活の体を手に入れます。神の目からは既に手にしています。そしてイエス様が戻って来られる時に、再会できる希望があるのです。

4A 死を飲み込む命

こうやって、人間にとって最大の敵である死に対して、神は呑み込むようにしてそれを滅ぼされます。「I コリ 15:52-55 終わりのラツパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラツパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになるからです。そして、この朽ちるべきものが朽ちないものを着て、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、このように記されたみことばが実現します。「死は勝利に呑み込まれた。」「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。』」